



TITLE:

京大広報 No. 695

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 695. 京大広報
2013, 695: 4029-4048

ISSUE DATE:

2013-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196378>

RIGHT:



京大広報

No. 695

2013.12



第8回京都大学ホームカミングデイ ー関連記事 本文4033ページー

目次

男女共同参画が叫ばれる中で 男女共同参画担当副学長 稲葉 カヨ……	4030
〈大学の動き〉	
第2回京都大学・コッチ大学共催シンポジウム を開催……	4032
第57回京都大学未来フォーラムを開催……	4032
第8回京都大学ホームカミングデイを開催 ……	4033
京都大学高校生フォーラム in Tokyo を開催 ……	4034
スイス連邦工科大学(ETH)で国際シンポジウム “Swiss-Kyoto Symposium”を開催……	4035
〈寸言〉	
ミッシングリンクつなぐ夢 永野 健二……	4036
〈随想〉	
至福の時間 名誉教授 白山 義久……	4037
〈洛書〉	
我が国の大学教育オープン化の先駆者たれ 飯吉 透……	4038
〈栄誉〉	
本席 佐 名誉教授(医学研究科客員教授)が 文化勲章を受章……	4039

松沢哲郎教授、吉川忠夫名誉教授が文化功労者 に選ばれる……	4040
清野 裕名誉教授、稲垣暢也 医学研究科教授ら のグループがエルウィン・フォン・ベルツ賞 1等賞を受賞……	4041
〈話題〉	
平成25年度総長杯(ボウリング大会)を開催 ……	4043
平成25年度京都大学森林科学公開講座 「人・木・森」を開催……	4043
宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を 開催……	4044
日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「リスク 評価に基づくアジア型統合的流域管理のため の研究教育拠点」第3回包括シンポジウムを 開催……	4045
社寺見学会を実施……	4046
〈訃報〉……	4046
〈特集〉「京大ウィークス2013」Vol.1 ……	4047

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

男女共同参画が叫ばれる中で

男女共同参画担当副学長 稲葉 カヨ

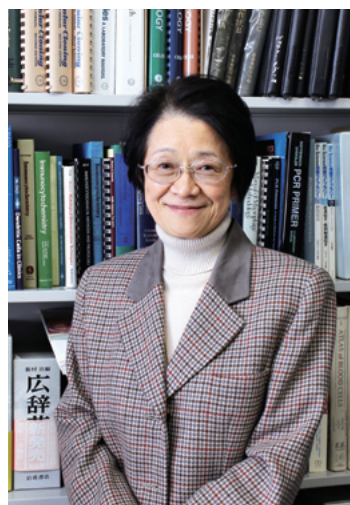
日本独自の男女共同参画ということばが世の中に浸透してきていますが、英語の表記では“Gender Equality(男女平等)”です。この男女共同参画ということばは、1999年に施行された“男女共同参画社会基本法”に端を発するものです。内閣府男女共同参画局のホームページには『男女共同参画社会とは、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」です。(男女共同参画社会基本法第2条)』と謳われています。

しかし、国際男女格差レポート(The Global Gender Gap Report)2013によれば日本は136ヶ国中105位で、昨年の101位からさらにランクを落としています。その最大の理由は、政治参加における女性の減少と、経済活動におけるリーダーの数の少なさです。言い換えれば、発言力を持つ女性の数が少ないということになります。

国の施策

この“男女共同参画社会基本法”の施行から14年、この間に男性中心の社会の中に女性の能力を発揮する機会を増やすための環境を抜本的に整備するための男女共同参画基本計画が策定され、現在は2011年度から5年間の第3次基本計画期間中に入っています。この中には従来からあげられていた重点分野に加えて、さらにいくつか分野が付け加えられ、広範な分野における種々の施策が掲げられています。男女共同参画を推進し、多様な選択を可能にする教育・学習の充実(第11分野)や、科学技術・学術分野における男女共同参画(第12分野)があり、大学の教授等に占める女性の割合を2020年までに30%とするとの数値目標が掲げられています。

やはり2011年度から第4期計画に入った科学技術基本計画においても、Ⅳ．基礎研究及び人材育成の強化における、「3．科学技術を担う人材の育成－(2)独創的で優れた研究者の養成」の「③女性研究者



の活躍促進」の項目の中に、2015年までに「自然科学系 25% (早期)、更に30%を目指す。特に理学系 20%、工学系 15%、農学系 30%の早期達成及び医学・歯学・薬学系合わせて30%の達成を目指す。」とあります。これらの目標達成のため

のポジティブ・アクションを実施することの重要性にも触れられています。

科学技術分野における女性の活躍促進施策

このような動きを受けて、日本学術振興会(JSPS)では出産・育児による研究中断からの復帰支援として、特別研究員(RPD)の採用を2006年度から開始しています。

また、科学技術振興機構(JST)は2006年度から2010年度に総合的支援環境作りのための「女性研究者支援モデル育成」事業を、その後継事業として2011年度から「科学技術人材育成補助事業」の中に「女性研究者研究活動支援事業」を開始しました。さらに、2013年度からは、従来の「女性研究者研究活動支援事業」を「一般型」とした上で、他大学や企業等の他機関との連携や取り組みの強化を目的とした「拠点型」というカテゴリーを新たに設けました。また、女性研究者のより積極的な採用・養成の促進を目指して、2009年度から2年間、「女性研究者養成システム改革加速」事業も実施されました。JSTの事業はいずれも自然科学系の分野を含む領域の研究を行っている機関・大学が応募できるものですが、明確な数値目標の記載が要求されています。

国立大学協会における男女共同参画

一方、このような動きの中で国立大学協会も、女性の進学率が大学院も含めて上昇しており、女性の能力発揮のための環境整備(大学の教員や研究者の採用を含む。)は我が国の発展と成長に大きく資するとして、2011年2月には「国立大学における男女共

同参画推進について「アクションプラン」を公表しました(<http://www.janu.jp/post.html>)。その中には「国立大学の女性教員比率を20%以上に引き上げることを目指しつつ、少なくとも2015年までに17%以上(各大学において1年ごとに1%以上)に引き上げることを達成目標として設定する」と共に、「目標達成のために大学が取り組むべき事項を提言し、それらの実施状況についてフォローアップを行う」とされています。ちなみに2012年5月1日現在の国立大学の女性教員比率は13.6%です。

本学の取り組み

このような種々の取り組みが推し進められる状況の中で、本学においても2006年度の科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成事業」に採択されたことにより「女性研究者支援センター」(以下センター)を設立し、女性研究者の増加を目指した環境整備に取り組んできました。また、「京都大学における男女共同参画(基本理念・基本方針)」(2006年3月)を策定し、さらに「京都大学男女共同参画推進アクション・プランに向けて(提言)」(2007年10月)を公表しました。これを受けて男女共同参画推進室(<http://geco.adm.kyoto-u.ac.jp/index.html>)は2008年度に、2009年度から5年間の「京都大学男女共同参画推進アクション・プラン」を策定し、それに沿って、男女共同参画推進室において女性が存分に能力を発揮できる大学となれるように努力してきております。とりわけ、毎年重点部局を決めて、教授会を訪問して国内外の状況を説明し、理解と協力を求めるとともに、毎年度各部局における進捗状況をまとめて部局長会議に報告してきております。今年度からはベビーシッター利用券の発行も開始しました。

一方、センター(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/index.php>)におきましても、病児保育室や入園待機乳児のための保育室を開室すると共に、お迎え保育事業や、育児介護中の男女教員を対象に実験補助者の雇用支援を行っており、また、本学への女子入学者増を目指して、女子高校生と保護者を対象とした「車座フォーラム」を開催しています。

本学の数値から見る現状と目標

従来の助手が助教と助手に分けられた2007年5月

1日には214名であった正規雇用女性教員数は2013年には252名となり、比率も7.5%から9.1%と増加しました。この増加は、助教に限ったものではなく、どの職階においても様な増加が見られます。この間の特定有期雇用を含む女性教員数も216名(7.5%)から362名(10.6%)となりました。しかし、この比率は大規模国立大学としては最低の値です。この状況を改善するため、2013年に採択された本学の「研究力強化実現構想」において、研究力強化方針として五つの柱が立てられており、その中に「世代と性別を超える(人材多様性の確保)」が謳われ、取り組みの一つとして女性研究者の確保があげられています。しかも、5年後の目標として、女性研究者数の伸び率を2013年の1.23倍以上とされています。この値は、この間に80名程の女性教員の採用を目指すことを意味します。

おわりに

一般の企業においては、その収益のために男女がワークライフバランスを保つことができる就労環境を整えることはある程度可能です。ところが、教育と研究を担う大学では、多様な職種の人が集まっており、その個々の部局や個人が担うものは一律ではないため、ワークシェアリングが可能とは言えません。政府が推し進める工業立国としての日本を担うのは理系(STEM: Science, Technology, Engineering, Mathematics)の研究推進であると同時に、それらの分野の将来を担う人材育成も大学に課された大きな責務です。すそ野の拡大をしなければ、理系の分野において男女共同参画を進めることは殆ど不可能です。また、そのためには、それぞれの人の意識を変革することも重要です。そのうえで、男女ともに互いを認め助け合い、多様な力を結集することによって豊かな発想と新たな展開のもとに持続的発展を目指して、男女共同社会を形成することが大切だと考えています。

本学の「男女共同参画推進アクション・プラン」は、本年が最終年度にあたります。現在この5年間を総括しつつ、今後のさらなる推進に向けた方針の策定に着手しております。今後とも、男女共同参画にご理解をいただき、推進に対するご協力を切にお願いいたします。

大学の動き

第2回京都大学・コッチ大学共催シンポジウムを開催

9月17日(火)から9月19日(木)までの間、コッチ大学(トルコ)との共催で、第2回京都大学・コッチ大学共催シンポジウムを開催した。

このシンポジウムは、本学とコッチ大学の協力関係の推進を目的として、医学・医療工学を中心テーマとして開催し、50人以上の研究者の参加があった。

1日目は芝蘭会館稲盛ホールにおいて、松本 紘総長およびウムラン・イナン コッチ大学学長による開会挨拶の後、本学、コッチ大学双方の研究者による研究発表が行われた。研究発表は2日目にも引き

続き行われ、会場では活発な質疑応答が行われた。

また、芝蘭会館2階ホールロビーではポスターセッションが開催され、ここでも研究者間の熱心な意見交換が行われた。

3日目にはiPS細胞研究所、医学部附属病院、医学研究科の最新施設・設備の見学を行い、本学研究者と直接熱心に意見を交わした。

今回のシンポジウムでは3日間ともに活発な議論が展開され、本学、コッチ大学双方にとって、さらなる共同研究の可能性を模索する貴重な機会となった。



記念品を交換する松本総長とイナン学長



シンポジウムでの集合写真

(研究国際部)

第57回京都大学未来フォーラムを開催

11月7日(木)、本学文学部卒業生で東京大学名誉教授の上野千鶴子氏を講師に迎えて、京都大学未来フォーラムが百周年時計台記念館において開催さ

れた。

講演の中で上野氏は、ウーマン・リブの誕生からジェンダー研究が成立するまでの過程および

その背景について解説されたのち、ジェンダー研究の立場から、ネオリベ(新自由主義)改革がもたらした現代社会の歪みを指摘し、誰もがいつかは社会的弱者となる今の日本社会においては、安心して弱者になれる社会の実現が必要であるとの考えを述べられた。

参加者からは「大変有意義で、興味深い講演であった」、「ジェンダー学は面白いと思った」、「新しい発見があった」、「ネオリベが人々を不幸にすることがよく判った」などの感想が寄せられた。

(渉外部)



講演をする上野氏

第8回京都大学ホームカミングデイを開催

11月2日(土)に「情熱と信念(Passion and Conviction)」をテーマとして、「第8回京都大学ホームカミングデイ」を開催した。同窓生(卒業生、修了生、元教職員)、教職員、学生など延べ約2,700名の参加があった。

百周年時計台記念館百周年記念ホールでは、京都大学同窓会代表幹事の小寺秀俊 理事・副学長の進行のもと、京都大学同窓会長の松本 紘 総長から、役員フロアに掲げられている水墨画「菜根図」(富岡鉄斎 1915年作)に書かれている詩文をとりあげ、「何



挨拶する大城会長

かを成し遂げるためには、情熱と信念がなければならない」との挨拶があった後、京都大学同窓会役員代表として大城 清 沖縄大文学会長(医学部・1973年卒)の挨拶があった。



講演する稲盛理事長

同ホールで開催された講演会では、中継会場も含め700名近い参加者があり、公益財団法人稲盛財団の稲盛和夫 理事長による「情熱と信

念 一新しき計画の成就是、只不屈不撓の一心にあり さらばひたむきに只想え、気高く 強く 一筋に一」と題する講演があった。参加者は稲盛理事長の幾多の困難を乗り越えてこられた話に魅了され、感銘を受けた。

この後、会場を国際交流ホールに移し、時任宣博 化学研究所教授の進行により行った懇親会では、オープニングに学生サークルTREVISによるチャリーディングが披露された後、赤松明彦 理事・副学長の挨拶と乾杯の発声があった。会場が華やかに盛り上がる中、山本成晃 応援団長のリードにより、参加者全員で第一応援歌「新生の息吹」を合唱し、懇親会は盛況のうちに閉会となった。



音楽会

百周年記念ホールにおいて開催された午後の部の音楽会では、京都大学交響楽団57名による「ニルンベルクのマイスタージンガー」、「トランペット吹きの休日」、「ラデツキー行進曲」、「プリंकプランク」の演奏があった。

他の企画として、iPS細胞研究所国際広報室の和田濱裕之 サイエンスコミュニケーター、未生流 笹岡家元の笹岡隆甫氏(工学部・1997卒)、落語家の桂 福丸氏(法学部・2001年卒)といった若手卒業生を講師に迎えて、学内各所において講座を開催した。百周年時計台記念館の京大サロンでは生け花展を行い、重要文化財指定の清風荘をはじめ尊攘堂、附属図書館の施設見学、総合博物館企画展「海」にも多数の見学者があった。



講演会風景

このほか、百周年時計台記念館と楽友会館では、学部・研究科等同窓会、地域同窓会の設立記念大会や懇親会などが開かれた。また、国際交流ホールでは、「OB・OGと学部学生・大学院学生との交流会」を開催し、若手卒業生と現役学生が就職をテーマに

熱心に意見交換をするなど、賑やかな一日となった。

次回は平成26年11月1日(土)に開催を予定している。

(渉外部)

京都大学高校生フォーラム in Tokyo を開催

11月1日(金)、有楽町朝日ホールにおいて、首都圏の高校生約500名の参加のもと、京都大学高校生フォーラムin Tokyo【京都大学松本 紘総長講演会】を、東京都教育委員会との共催で開催した。

このフォーラムは、首都圏の高校生を対象に、最先端の研究成果等について講演することにより、大学進学を目的を明確にするとともに進学後の自己の在り方や生き方への意識を高めることを目的として、平成23年度から開催しているもので、今年で3回目となる。



挨拶する比留間教育長



講演する松本総長

講演に先立ち、東京都教育委員会比留間 英人教育長からの挨拶の後、首都圏の高等学校から本学へと進学した在学生2名よりメッセージが送られ、本学や京都の魅力、大学生活の充実ぶりなどについて紹介された。

「人類の100年後を考えよう！～西暦2100年“太陽系文明”の夜明け～」

をテーマとした松本総長の講演は、100年という時間や人類が抱える課題を俯瞰し、既存の知識から一歩踏み出して考えることの大切さと、「未来は自分の手で作るもの」というメッセージが伝えられ、会



会場を埋め尽くす高校生

場を埋め尽くす高校生は、数々の興味深い話に熱心に聞き入っていた。後半では、参加者を対象に行ったアンケート「私が考える人類の100年後」の中から7名の思い描く未来を紹介、松本総長がコメントするとともに、会場を交えての質疑応答が行われた。最後に、参加した生徒の代表より松本総長にお礼の言葉が述べられた後、花束が贈呈され、フォーラムは盛会のうちに終了した。



高校生とのディスカッションの様子

(総長室)

スイス連邦工科大学(ETH)で国際シンポジウム“Swiss-Kyoto Symposium”を開催

平成26年に、日本とスイスが国交樹立150周年の記念すべき年を迎えるのに先立ち、11月21日(木)と22日(金)に、スイス・チューリッヒにおいて、スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETHZ)、チューリッヒ大学(UZH)およびスイス連邦工科大学ローザンヌ校(EPFL)と本学との共催による国際シンポジウム“Swiss-Kyoto Symposium”を開催した。

本シンポジウムは、本学が世界に卓越した知の創造を行う大学として一層発展し、真のトップレベル大学としての地位を確立することを目標に、本年6月に新たに策定した「京都大学の国際戦略」の一環として実施された。学術成果を広く世界へ発信することにより、国際社会における本学のプレゼンスを高め、国際共同研究の推進に寄与することを目的に、関係大学・機関から、2日間で延べ350名を超える参加があった。

初日は、ラルフ・アイヒラー学長(ETHZ)の歓迎の言葉に始まり、松本 紘総長、ミハエル・ヘンガルトナーク次期学長(UZH)、カール・アベレ副学長

(EPFL)からの挨拶に続いて、前田隆平 在スイス日本国大使館特命全権大使より祝辞をいただいた。松本総長からは、このように研究者同士が新たに出会い、学術研究の発信・知の共有を行うことで、相互交流を深め、



開会の挨拶を述べる松本総長



大学間学術交流協定書の署名式を行う
ワイラー副学長(左)と松本総長(右)

国際的な大学間連携や共同研究の発展・深化に寄与する貴重な契機となることに対する期待の意が伝えられた。

続いて、ダニエル・ワイラー副学長(UZH)と松本総長により、チューリッヒ大学と本学との大学間学術交流協定書への署名式が行われた後、ローランド・ジークバルト副学長(ETHZ)、吉川 潔 研究担当理事・副学長、ワイラー副学長(UZH)、アベレ副学長(EPFL)から、各校の紹介があり、本学長田重一医学研究科教授およびETHとUZHを兼務するクラス・エンノ・ステファン教授による基調講演へと続いた。

午後からは、四つのキャンパスに分かれ、再生医科学、エネルギー科学、経済学、哲学など16のセッションが展開され、各大学の研究者のみならず、在スイス関係機関からも多くの参加者が会し、今後の研究協力に繋がる熱い議論が繰り広げられた。

2日目は、前日に引き続き、各分野別のセッションや研究室訪問等を行った後、夕方からのセッション参加教員による報告会(ラップアップ)では、各セッションの代表者から、2日間の研究成果報告があり、最先端の学術研究に触れるとともに、今後の教育・研究連携に向けた展望について話し合う実りある貴重な機会となったことが確認された。最後に、三嶋理晃 国際担当理事・副学長をはじめ各共催校の代表者による閉会の挨拶で、盛況のうちに幕を閉じた。



ラップアップの様子

(研究国際部)

寸言

ミッシングリンクつなぐ夢

永野 健二

1973年に京都大学経済学部を卒業してから、40年が過ぎた。昨年の6月、大阪本社代表を最期に日本経済新聞社からBSジャパンというテレビの世界に転じた。

70年代から80年代にかけて日本がジャパニア・ズナバーワンと言われた時代、そして、80年代から90年代初頭にかけてバブルの増殖・崩壊の過程を、経済記者として取材し報道する立場にあった。また1995年からは日経ビジネスの編集長、2001年からは日経MJ(流通新聞)の編集長という編集者の立場で、失われた20年と呼ばれる長期デフレの局面に向かい合った。メディア人生の大半を、記者として、編集者として最前線にいて、日本経済の盛衰とかかわれたことを、幸せだったと思う。しかし、順風だったかと問われれば「そんなことはなかったな」と思う。

33歳の時に、拡張性心筋症という不治の病を経験した。ある日、心臓が倍くらいに腫れ上がり入院、一命をとりとめたと思えば、今度は心室内に血栓が発覚、病院を移り、両親の承諾書も得られないままに即日緊急の開胸手術をほどこした。5年以内に心臓移植をする事態もあり得るというのが、当時の担当医の見立てだった。それが医療技術と薬品の進歩によって、外科的療法に頼らずなんとか生き続けることができた。わが主治医大滝英二先生のことばを借りれば「不治の病をかかえながら、ここまで社会生活と両立しているケースはほんとうに珍しい。同病の皆さんの励みになるように生き続けて本に出してもらいたい」ということだ。

病み上がりの時期も含めて、記者として活動し続けたいという思いは強かった。現実離れした希望が実現したのは、妻と先輩、同僚、後輩、忘れられない友人たちの支援によるものだ。日本経済新聞社という会社の理解がなければ、記者・編集者としての生活を続けることはできなかったことだけははっきりしている。私が市場経済と競争型社会の実現を主張しながら、「会社は誰のものか」という問題意識で、共同体としての日本の会社の役割にこだわり続けた



のは、会社という両義的な存在のおかげで「生かされてきた」という体験が大きい。

いまひとつ、折に触れて私のメディア生活を救ってくれたのが、京都との縁(えにし)だった。病み上がりの1983年11月に私に幸運をもたらしてくれたのは『京都信用金庫と大和証券が高利回り商品を開発』というスクープ記事だ。大銀行の固定金利が定着している中で、証券会社と信用金庫が、行政の壁を越えて新商品で連携するというニュースは、「金融自由化」の先鞭をつける日経らしいスクープだった。何度か京都に通いながらもものにしたこのニュースは、「病気をかかえていても記者を続けられる」という自信につながった。また田渕節也野村證券社長、荒木義朗富士銀行頭取、草場敏郎三井銀行社長、磯田一郎住友銀行頭取(いずれも故人)など、当時の金融界のリーダーに京都大学出身が多かった。バブルの増殖から崩壊の過程を取材する記者にとっては、かけがえのない取材対象であり人脈だった。

1995年に日経ビジネス編集長として『ビジョナリー経営』という特集を組み「京都企業はなぜ強い」と問いかけた企画も忘れがたい。京セラ、オムロンをはじめ、堀場製作所、日本電産、ローム、任天堂といった京都企業の強さの秘密は「経営理念」「経営哲学」にあるという切り口は、バブル崩壊後の混迷する日本経済のなかで、復活への一つの道筋を提供できたように思う。

いろいろな人に、メディアの世界は面白いですか、と聞かれる。「面白いです」と瞬時に答える。なぜかと問われれば「ミッシングリンクをつなぐ夢があるから」と答える。社会と関わり合いながら「謎解き」を続ける楽しみだと言える。

最近、トヨタ自動車の豊田英二氏が100歳の天寿をまっとうされ亡くなられた。追悼記がわりに1995年ごろ私がインタビューした上下合わせて2万字を上回る長文のインタビューが、日経ビジネスのオンライン版に当時のまま掲載されたことを、後で知った。40万回以上のコール回数があったという。

うれしかったのは、「今でも視点が古くなっていない。後輩たちに必ず読むようにと薦めました」というトヨタ幹部の言葉だった。ミッシングリンクをつなぐ夢はいまも続いている。

記者冥利である。

(ながの けんじ 株式会社BSジャパン代表取締役社長、昭和48年経済学部卒業)

随想

至福の時間

名誉教授 白山 義久

すべての人に平等に与えられているもののひとつに時間がある。「これほど貴重な資源はない。」京大にいた時も、そして現職の仕事をする上でも、そう思う。現代人はこの貴重な資源を効率よく使って、競争的な社会を勝ち抜こうと腐心している。そのなかでカギになるのは、情報伝達の速度だ。



私が学部生の時にサンゴ礁の魅力にとりつかれ、海洋生物学の研究に携わるようになってから、はや40年が経とうとしているが、その間の情報伝達環境の変化は目を見張るものがある。初めて研究船に乗り1週間の航海に参加したとき、陸上への通信手段は船舶電話だけだった。それも通話ができるのはごく沿岸だけで、通話料金は非常に高価だった。だから、基本的に船上は陸上から隔絶された世界だった。デッキの上で日没の30分くらい前からグリーンフラッシュを期待して遠くの水平線を眺めている時、そこには海と太陽と自分とが対話できる、ゆったりとした時間が流れていた。その中で、広大な海洋をよりよく理解するためにはどうすればよいのか、自問自答を繰り返していたのを思い出す。

その後、FAXが船舶への通信手段として確立し、状況は一変した。大西洋にいても、日本から書類が送られてくる。もはや通信手段がないから依頼が来ない、という状況ではなくなった。いわゆる雑用から逃れるすべはなくなり、乗船中は観測研究の仕事と雑用との二足の草鞋をはくことになった。そして、ゆったりとした時間が流れることはずいぶん減ってしまった。

今では衛星を通してインターネットにつながるので、船上へも続々とメールが届く。逆に、船から動画を配信することすら可能だ。かつて船の甲板で持ち物といえば、せいぜい野帳くらいだったが、最新鋭の研究船では船内の隅々まで無線LANが使えるので、スマホが必携である。現代の研究船は、24時

間体制で観測研究をしつつ、陸上にいるときと同じペースでペーパーワークもこなすことが求められる、肉体派の仕事場である。もはや、かつてふんだんにあった思索の場は、ほとんど残されていない。

通信速度は速くなったが、この間もほとんど速くなっていないものがある。それは、ヒトが文字を読む速度だ。通信の主流が電話と手紙だったほんの40年前、手紙より電話のほうが通信速度は速いし、その場で返事ももらえるから、もっとも重要な通信手段は電話だった。ワープロはなかったから、手紙は慎重に下書きをして手書きでしたためた。受け取る手紙の数は少数だったし、その手間を知っていたから、手紙が届けばすぐに開封してじっくりと読んだ。今や手紙といえば、ほとんどが電子メールである。多くの人が、ジャンクメールの山と毎日格闘しているに違いない。その結果、文字を読む時間はかつてより多いが、研究論文や図書を読む時間はむしろ減っているというのが実感ではないだろうか。電子メールが非常に有効な通信手段であるという現実を受け入れざるを得ないが、なにか狂っている。

かつてダーウィンが進化論を着想したのは、自宅にあるお気に入りの散歩道を散策しているときだった。優れた科学的着想を得て、その仮説をデータで検証するのが、自然科学である。画期的な成果を生み出すためには、着想を得るための思索の時間が必要なのだ。

学部生の時、小笠原諸島を訪れた。そこには、1週間分を束ねた新聞が売られていた。最近35年ぶりに、父島を再び訪問する機会があった。その海には、多くの人の努力のおかげで自然遺産にふさわしい豊かな自然が残っていた。そして、束になった新聞が相変わらず売られていた。この島では、いまもゆったりと時間が流れている。そう思うと嬉しくなって、さっそく新聞を購入し、木陰の椅子で微風を受けながらゆっくり読んで、至福の時間を過ごした。今でも思索にふける時間は、つくることができるのだ。もっとも、その時ですら、左手は携帯電話を握りしめていたが。

(しらやま よしひさ 平成23年退職 元フィールド科学教育研究センター教授 専門は海洋生物学)

洛書

我が国の大学教育オープン化の
先駆者たれ

飯吉 透



本学に着任してから、早いもので2年ほどが過ぎた。アメリカで20年近くを過ごし帰国した私にとっては、日本も日本の大学も、懐かしいというよりはむしろ「異境」であった。しかし、関西特有の「開放的で活力とユーモアに溢れた文化」は、自分には何かアメリカ的な懐かしさを感じられ、生まれ育った「故郷」の東京よりも、むしろ居心地が良くて有り難い。このような風土に支えられて、「日本や日本の大学のグローバル化は、まず関西から進んでいくのではないか」と感じられるほどだ。

私の研究のルーツは、教授システム学や教育工学と呼ばれる分野にある。とすると優れた教育は、「教育の名人」の暗黙知や経験によって司られる「伝統芸術」のように見なされるのに対して、教授システム学や教育工学という学問は、1950年代に始まった一般システム理論やシステムズアプローチなどの研究をベースに、教育という行為を分析的に捉え解明・改善することを指向し、学習科学等の研究分野とも融合しつつ現在に至っている。

ここ半世紀あまりの急激なICT(情報コミュニケーション技術)の進歩は、教育におけるテクノロジーの役割を「教えるための道具」から「学ぶための道具と環境」へと劇的に拡張した。その変化の中で、私が特に興味を持ってきたのが、「あらかじめ限定的に決められたことを、決められた形で教える」だけでなく、「知識の大海原」とも呼べるような「開かれた学習環境」において、個人の興味や関心に応じて、誰もが効果的な教育的ツールを利用しながら、自由に学び教え合える世界の実現であった。

私が約10年間勤めていたカーネギー教育振興財団は、1905年に教育の向上に関する学術調査や政策研究を行う独立系研究機関として設立され、アメリカの高等教育機関で用いられてきた「カーネギー大学

分類」や授業カリキュラムの単位化を先導した「カーネギー・ユニット」などを通じて、アメリカ内外の教育の進展に大きな影響を与えてきた。同財団で、私は知識メディア研究所を率いて、最新のメディア・ネットワークテクノロジーを利用し、教育の質を向上させるための研究開発に仲間と共に取り組み、とりわけ「オープンエデュケーション」(教育のオープン化)の普及と促進を通じた教育改善に力を注いだ。その後、本学に赴任する前の3年間は、オープンコースウェア等を通じてオープンエデュケーションにおけるリーダー的な役割を果たしていたマサチューセッツ工科大学で、教育イノベーションに関する戦略アドバイザー的な仕事にも従事した。

日本に戻ってしばらくして、文部科学省に勤める知り合いから「以前アメリカから日本にいられていた頃は、いつも講演などで『日本や日本の大学は、もっとオープンに変わらなければならない』と主張されていましたが、よく京大のような『最も変わりにくそうな大学』に行かれましたね」と冷やかされ、我ながら苦笑した。とんでもない話である。実は、本学は現在日本において、オープンエデュケーションを最も先鋭的に進めようとしている大学だ。オープンコースウェアは、ここ数年の間、国内のどの大学よりも精力的に推進してきたし、既にオープンソースの教育オンライン支援システム「PandA」も全学利用が可能だ。また、私が所属している高等教育研究開発推進センターでは、優れた教育実践における知見を学内外で共有するための「MOST」(<https://most-keep.jp>)というオープンな教育コミュニティ支援システムを開発・運用している。そして2014年4月からは、大学の講義をインターネットを通じて提供し世界中の誰でも受講可能にする「Massive Open Online Course(MOOC)」と呼ばれる試みが、いよいよ本学でも始まる(<https://www.edx.org/school/kyotoux/>)。このような「上昇気流」と「追い風」に乗って、本学の同僚教職員の皆さんや学生たちと力を合わせながら、是非とも「京大発」で日本の高等教育を世界に羽ばたかせていきたい。

(いいよし とおる 高等教育研究開発推進センター教授、専門は高等教育システム、教育イノベーション)

栄誉

本庶 佑 名誉教授(医学研究科客員教授)が文化勲章を受章

このたび、本庶 佑名誉教授が平成25年度文化勲章を受章され、11月3日(日)、皇居において親授式が行われた。以下に同氏の略歴、業績等を紹介する。

本庶 佑名誉教授は、昭和41年京都大学医学部を卒業、同46年同大学大学院医学研究科博士課程を修了、米国カーネギー研究所およびアメリカ国立衛生研究所(NIH)における博士研究員を経て、同49年東京大学医学部栄養学教室助手に採用され、同54年大阪大学医学部遺伝学教室教授とされた。昭和59年に京都大学医学部医科学教室第一講座(のちの大学院医学研究科分子生体統御学講座分子生物学分野)の教授に就任、在任中は6年間に渡り研究科長としても活躍され、平成17年3月に定年により退職、京都大学名誉教授の称号を受けられた。現在は、引き続き京都大学大学院医学研究科寄附講座免疫ゲノム医学講座の客員教授として研究を継続されている。



同名誉教授は分子免疫学の分野において、当該研究の幕開けとその後の研究展開に世界で最も先導的な役割を果たし、斯学の発展に多大な貢献をした。

すなわち、生体防御機構である免疫系の中で、最も重要で本質的な現象である獲得免疫における病原体の侵入に反応して起こる抗体の多様化について、その全貌を明らかにした。抗原特異的抗体が作られる過程では、一つの抗原に対して種類の異なる複数の抗体が産生されるクラススイッチと呼ばれる変化と、さらに抗原とよりよく反応するよう、抗体のアミノ酸配列の微調整(体細胞突然変異)が起こる。同名誉教授は、クラススイッチが抗体の主体であるH鎖のゲノム遺伝子の組み換えと切除によって生じる

ことを発見するとともに、H鎖抗体遺伝子を単離し解析することによって、同一の遺伝子上に連結して存在するH鎖抗体遺伝子の各部分が、特殊な反復配列を介した遺伝子組み換えによってクラススイッチがおこる事実を明らかにした。

また、クラススイッチと共に体細胞突然変異も制御するマスター分子であるAID分子の発見により、多彩な外来抗原に対して生体を防御するに足る多様な抗体を産生できるメカニズムを明らかにした。

加えて、同名誉教授は自ら発見したリンパ球の持つ免疫抑制分子PD-1受容体に対する阻害剤が、癌細胞に対する免疫反応を著しく増強させ、強い抗癌作用を示すことをマウスで明らかにした。近年ヒト臨床治療においてPD-1阻害剤の抗癌作用有効性が高いことが認められ、新しい癌治療薬として期待されている。

これら一連の研究に対して、同名誉教授には、朝日賞、木原賞、武田医学賞、ベーリング北里賞、上原賞、ロベルト・コッホ賞、ほか多数の賞が授与された。さらに平成8年に恩賜賞、学士院賞が授与され、同12年には文化功労者に選ばれた。これまでに、学士院会員、米国免疫学会名誉会員、米国科学アカデミー外国人会員、ドイツ自然科学者アカデミー・レオポルディナ会員にも選出されている。

今回の文化勲章受章は、これまでの同名誉教授の一連の業績が高く評価されたものであり、大変喜ばしいことである。

(大学院医学研究科)

松沢哲郎教授、吉川忠夫名誉教授が文化功労者に選ばれる

このたび、松沢哲郎霊長類研究所教授、吉川忠夫名誉教授が平成25年度文化功労者に選ばれ、11月5日(火)に東京都内で顕彰式が行われた。以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

松沢哲郎霊長類研究所教授は、昭和49年京都大学文学部を卒業、同大学院文学研究科博士課程を経て、同51年霊長類研究所助手、同62年助教授、平成5年教授に就任した。また、平成18年4月から6年間霊長類研究所所長を務めた。さらに、平成24年から国際霊長類学会会長を務めるなど、斯学の発展にも寄与している。



同教授は、ヒトと最も近縁なチンパンジーを対象に、アフリカの生息域での研究と日本の実験室での研究を融合させた独自の手法で「進化の隣人」と呼べるチンパンジーの暮らしと心の世界を明らかにし、人間の認識と行動の進化的起源について数多くの知見を生み出すことにより、「比較認知科学」と呼ばれる研究領域を開拓し、その発展に多大な貢献をした。同教授の研究は、「チンパンジーの心の研究」を基盤に、人間の認識と行動の進化的基盤を明らかにしたものといえ、同教授が開拓した「比較認知科学」は、いわば心理学と霊長類学から生まれた、認識の進化を扱う独創的な研究領域である。同教授はチンパンジーの認識と行動を、アフリカの自然場面での観察研究と、「アイ・プロジェクト」と呼ばれる日本の実験室場面での実験研究を融合させた新しい視点から

総合的に研究し、日本の実験室での研究では、チンパンジーの瞬間記憶が人間を凌駕することを発見した。知覚・記憶等の情報処理過程において、ヒトとチンパンジーの類似と同時に相違も見出し、それがそれぞれの種の生態学的環境と深く関わっていることを指摘した。アフリカの自然の生息地での研究では、野生のチンパンジーの生態、特に石器など道具使用とその習得過程に焦点を当てて、チンパンジーにも教育や文化と呼べるものがあることを明らかにした。

同教授はさらに、こうした観察と実験の手法を融合させて、特に親子を含めたチンパンジーのコミュニティ全体をシミュレーションする飼育下の研究を行い、世代間で知識や技術が文化的に伝播する様相を克明に描き出し、親子の絆や社会的な場面での学習の重要性を明確に示した。以上のように、同教授はチンパンジーというユニークな素材を対象とすることにより、人間の認識や行動の進化的な起源を解明、人間の本性について新たな理解をもたらした。

これらの一連の業績が高く評価され、中日文化賞、ジェーン・グドール賞、毎日出版文化賞を受賞された。また、平成16年には紫綬褒章を受章され、さらにこのたび文化功労者として顕彰されたことは、誠に喜ばしいことである。

(霊長類研究所)

吉川忠夫名誉教授は、昭和34年に京都大学文学部史学科を卒業、東海大学文学部講師、本学教養部助教授を経て、同49年に人文科学研究所助教授に配置換え、同59年教授に昇任、平成3年より2年間、人文科学研究所長を務められ、同12年停



年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。平成18年、日本学士院会員に選出され、現在に至るまで同院の会員である。

同名誉教授は、漢代から唐代に至る中国史および中国思想史の分野において、数多くの優れた業績を挙げてこられた。驚くべき読書量に裏打ちされた厳密な中国文献の読解は、文学・史学・哲学といった

学科の範囲を越え、中国の伝統文化の真相に迫るものであり、学史に遺る多数の論文を生み出された。

吉川名誉教授の研究のうち、もっとも重要な業績は六朝隋唐時代における精神史に関するものである。中国思想史上における六朝隋唐時代の特徴は、漢代以来の伝統を継承する儒教、西方から伝来した仏教、中国人の民族宗教として成立した道教、これら三者が並存し、その間で相互の浸透、反発、融合が繰り返された、中国史上他に例を見ない宗教の時代であったという点にある。吉川名誉教授は、このような儒教・仏教・道教が複雑に錯綜した時代の人々の生活と精神の営みとを、広汎な資料を駆使し、かつ綿密な文献批判のもとに生き生きと描きだすことによって、従来の歴史研究や思想史研究の枠に収まらない、独創的な観点と方法を打ち立てられた。その研究は、『六朝精神史研究』『中国人の宗教意識』などの著作に収められている。

学術論文に限らず、吉川名誉教授の著作はすべて格調高い名文によって書かれている。南朝宋の創始者である劉裕を例として、武人と貴族とが合体融合して権力を形成していくという南朝政権の本質を明らかにした『劉裕』、東晋期に文化的優位を保ちつつも、河北を異民族支配に委ね、南北対峙の状況を受け入れざるを得なかった南朝政権が、梁末に起こった侯景の乱を契機として、軍事的にも北朝に打ち打ちできなくなり、やがてその終焉を迎えるに至る過

程と、そこにあらわれた南朝貴族社会の特質を解明した『侯景の乱始末記—南朝貴族社会の命運』などは、その時代の営みを生き生きとした筆遣いで描き出した一般書である。

また、人文科学研究所で組織された共同研究班の成果である『真誥研究(訳注篇)』と『周氏冥通記研究(訳注篇)』の二書は、六朝道教の重要かつ難解な文献について高水準の訳注を施したものであり、国内はもとより中国においても高い評価を得、両書ともに中国語に訳出・出版され、彼の地の学界を裨益している。

近年、岩波書店より刊行された『後漢書』全10冊は、深い学識に裏付けられた訓読ならびに注であり、余人の追随を許さぬ古典の読解力を遺憾なく発揮されたものである。その後に訳出され、同じく岩波書店より刊行された『高僧伝』全4冊は、初期の中国仏教の歴史を伝えるものとして、今後、長く読み継がれるにちがいない。

以上のような業績に対し、平成18年12月、吉川名誉教授は日本学士院会員に選出され、さらに同21年1月には、宮中における講書始において、「後漢、六朝時代における中国人の仏教受容」という題目のもと、進講を務められた。今回の文化功労者への選出は、我が国を代表する中国学研究者たる吉川名誉教授を大いに顕彰するものであり、まことに喜ばしい。

(人文科学研究所)

清野 裕名誉教授、稲垣暢也 医学研究科教授らのグループがエルウィン・フォン・ベルツ賞 1 等賞を受賞

日本の医学研究の分野において優れた論文に対して贈られる第50回「エルウィン・フォン・ベルツ賞」の1等賞に、清野 裕名誉教授、稲垣暢也 医学研究科教授らのグループが選ばれ、10月16日(水)に東京のドイツ連邦共和国大使館公邸において、贈呈式が行われた。ベルツ賞は、日独両国間の歴史的な医学関係を回顧すると共に、両国の医学面での親善関係をさらに深めて行く目的で、1964年にドイツの製薬会社ベーリンガーインゲルハイム社によって設立された賞である。以下に各氏の略歴、業績等を紹介する。

清野 裕 名誉教授は、昭和42年に京都大学医学部を卒業し、同年4月より医学部附属病院において医学実地修練、同43年4月から同病院内科にて研究および診療に従事、同48年4月から神戸大学医学部附属病院助手、同54年4月京都大学原子炉実験所助手、同55年4月医学部附属病院助手、同60年4月同助教授、平成8年2月大学院医学研究



稲垣暢也教授は、昭和59年に京都大学医学部を卒業し、同年6月より同医学部附属病院研修医となり、平成4年3月から千葉大学医学部附属高次機能制御研究センター助手、同7年6月同講師、同8年11月同助教授、同9年9月秋田大学医学部教授を歴任した後、同17年4月京都大学大学



今回の受賞は、「インクレチン：生理学、病態生理学、そして臨床医学への展開」の研究が評価されたもので、山田祐一郎 秋田大学大学院医学研究科教授、清野 進 神戸大学大学院医学研究科特命教授との共同受賞である。

グループは、インスリンの初期分泌障害が日本人2型糖尿病の特徴であることを明らかにし、さらに、消化管因子であるインクレチンによるインスリン分泌の分子基盤を確立した。また、インスリン分泌におけるグルコースとインクレチンの相互作用やインクレチンによる膵外作用を解明すると同時に糖尿病におけるインクレチンの役割を明らかにした。これらの成果によりインクレチン関連薬の臨床医学が切り開かれた。

今回の研究は、日本人2型糖尿病の病態が初期インスリン分泌障害を特徴とし、さらには消化管因子のインクレチンが初期インスリン分泌を規定し、糖尿病ではGIP-インスリン軸が破綻しているという臨床研究から得られた知見を出発点としている。これを分子生物学的・発生工学的手法などによって発

科教授、医学部附属病院病態栄養部長併任、同13年4月には同病院副病院長に就任、同16年3月本学を退職され、同16年4月に本学名誉教授の称号を授与された。現在は関西電力病院院長を務められている。

学外では、日本糖尿病学会の重要な役職を歴任され、現在日本病態栄養学会ならびに日本糖尿病協会の理事長として、またアジア糖尿病学会の理事長として、日本やアジア地域での糖尿病の診療や療養指導の発展と向上に大きく寄与されている。

院医学研究科教授、医学部附属病院病態栄養部長併任、同19年4月同病院疾患栄養治療部長併任、同23年4月から同病院副病院長(経営担当)として、同病院の経営に尽力されている。

学外では、日本糖尿病学会常務理事、日本病態栄養学会理事、日本糖尿病協会業務執行理事などの役職を務め、糖尿病の成因解明と新たな治療法の開発に尽力されている。

展させ、GIPやGIP受容体のcDNAや遺伝子構造を決定するとともに、GIP受容体ならびにGLP-1受容体欠損マウスを解析することでインクレチンであるGIPとGLP-1が食後早期のインスリン分泌を調節し、血糖恒常性の維持に必須であることを示すなど、インクレチンによるインスリン分泌の分子基盤を確立した。さらに、膵β細胞におけるインクレチンによるインスリン分泌調節機構の解明のなかでその標的分子の発見、糖尿病状態でインクレチンが酸化ストレスを抑制してグルコースによるインスリン分泌障害を是正するとの知見、GIPを主とした膵外作用の発見、特に脂肪細胞へ作用して肥満を生じるとする発見は、インクレチン研究の新たな分野を切り開いた。日本人糖尿病における初期インスリン分泌障害を是正し血糖降下作用を発揮する薬物療法として、現在、インクレチン関連薬が多くの糖尿病患者の治療に用いられていることは、まさに“From Bed to Bench, and Back”と言える類まれな成功例である。

(大学院医学研究科)

話題

平成25年度総長杯(ボウリング大会)を開催

10月25日(金)午後6時30分から京劇ドリームボウルにおいて平成25年度総長杯(ボウリング大会)が行われ、17部局から38チームが参加した。試合終了後の表彰式では、石崎宏明総務部長より優勝杯、表彰状が授与された。

成績の結果は次のとおり。

団体

優勝：情報部ボウリング同好会チーム

(1,385ピン)

岡田悦子，南 幸一，櫻井恒正，高見好男

準優勝：北部構内共通事務部・理学研究科

理学選抜チーム

(1,345ピン)

吉田隆二，服部正昭，清原文博，名取保雄

個人

男性 優勝：高見好男(情報部)(403ピン)

女性 優勝：岡田悦子(情報部)(326ピン)



優勝した情報部ボウリング同好会チーム



大会風景

(総務部)

平成25年度京都大学森林科学公開講座「人・木・森」を開催

生存圏研究所と農学研究科森林科学専攻の共催により「平成25年度京都大学森林科学公開講座」を10月26日(土)，27日(日)に開催した。

この公開講座は、私たちにとって森林や樹木，木材がいかに重要であることを深く理解してもらうことを目的として，毎年開催している。

今年は、「人・木・森」をテーマとし，初日は，里山や木製文化財，木に囲まれた居住環境といった日本の風土で育まれた文化的側面から，木を身近に感じてもらい，さらに広がる森の世界について5人の講師が講演を行った。



熱心に講演を聞いている参加者

また2日目は，法隆寺五重塔の心柱標本が展示されている材鑑調査室の見学のほか，「レンズで覗い

てみよう木の世界」,「萬福寺で見る『人・木・森』のつながり」,「シロアリという生き物を解剖する!」という三つのコースに分かれて実習を行った。

2日間で延べ50名を超える参加者は熱心に受講し, 森や木の大切さを知る秋の1日となった。

(生存圏研究所・大学院農学研究科)

宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

11月7日(木), 宇治キャンパスにおいて, 外国人研究者・留学生に対する支援の一環としてリサイクルフェアを開催した。

宇治地区関係者から家庭に眠っている遊休品の提供を受け, 無償で外国人研究者・留学生に提供するリサイクルフェアの開催は今年で8回目となり, 例年と同様に, 外国人研究者・留学生と教職員との交流会も同時開催した。

リサイクルフェア会場となった, 宇治おうばくプラザハイブリッドスペースでは, 関係者の協力により集まった約400点の物品が並べられ, 研究者, 留学生や, その家族など70名を超える来場者があった。毎年大人気のこの催しは, 机や椅子などの家具から電化製品, 布団, 衣服, 食器や鍋といった日常用品, 子供用雑貨やおもちゃなど様々な物が出品され, 単身者にも家族連れにも喜ばれている。

リサイクルフェア会場の隣に設けられた交流会会場では, 参加者がフェアで選んだ品物を囲んで, お茶を片手に楽しい歓談の時間を過ごした。

また交流会コアタイムには, 宇治地区研究所の所



佐藤所長の挨拶

長も参加し, 佐藤直樹 化学研究所長の挨拶の後, 岸本泰明 エネルギー理工学研究所長, 大志万直人 防災研究所長, 塩谷雅人 生存圏研究所 副所長の紹介があった。その後, 引き続き行われた日本人学生の司会・進行によるビンゴゲーム大会やテレビの抽選会で, 会場は大いに盛り上がった。

宇治キャンパスでは, 外国人研究者690名(年間), 外国人留学生100名程度が研究のために来訪, 滞在しており, 今後もこういった生活支援事業を続けていく予定である。



リサイクルフェア会場



ビンゴゲーム大会の様子

(宇治地区事務部)

日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」第3回包括シンポジウムを開催

工学研究科を日本側拠点機関、マラヤ大学をマレーシア側拠点機関として実施している日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」の一環として、10月28日(月)と29日(火)に、第3回包括シンポジウムを宇治おうばくプラザにて開催した。

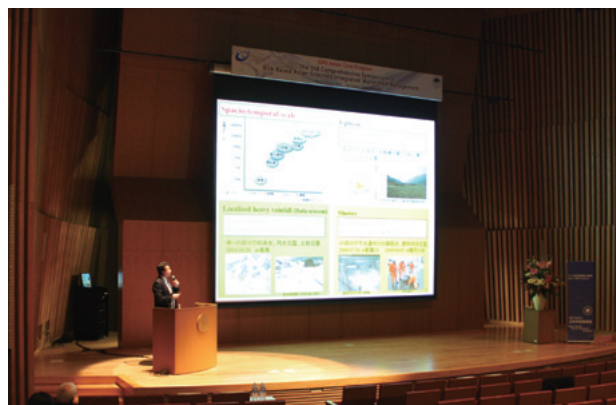
1日目午前中のオープニングセッションでは、事業開始から2年半の共同研究・交流の様子を綴ったスライドショーの上映に始まり、北野正雄 工学研究科長の歓迎の挨拶、日本側コーディネーターの清水芳久 工学研究科教授、マレーシア側コーディネーターのNik Sulaiman マラヤ大学教授からの挨拶お



オープニングセッションでの記念品交換

よび研究進捗状況紹介、続いて佐藤祐一 滋賀県琵琶湖環境科学センター研究員による招待講演が行われた。午後にはポスターセッションでの74件の発表に続き、中北英一 防災研究所教授、中村正久 滋賀大学環境総合研究センター教授による基調講演が行われた。

2日目は4研究グループ(水文、水質、環境リスク、ガバナンス)に分かれて、現在までの研究の成果報



中北教授の基調講演

告と今後の若手研究者育成計画、教科書作成計画等について具体的な議論を進めた。

クロージングセッションではコーディネーターから、この研究教育拠点事業を通して両大学が拠点となって流域管理を推進し、広く社会に貢献していくことの大切さが強調され、参加者全員でその思いをあらためて共有することとなった。

また、今回は特に若手研究者の研究推進奨励のため「優秀ポスター賞」が設けられ、本学修士課程学生を含む12名が表彰された。今後の国際学術交流・共同研究を推進してゆく担い手としての活躍につながることが期待されている。

マレーシアからの来日研究者45名を含み、本学学生も合わせて130名の参加者を得たシンポジウムは盛会のうちに幕を閉じ、本事業の研究成果達成に向けての重要な布石となった。



シンポジウム参加者

(大学院工学研究科)

社寺見学会を実施

11月9日(土),平成25年度京都大学社寺見学会『秋の西大和路をたずねて』が行われ,56名が参加した。当日は晴天に恵まれ,慈光院(奈良県大和郡山市),当麻寺(奈良県葛城市)を巡り,それぞれの専門分野の講師の解説に参加者一同,興味深く耳を傾け,とても有意義な一日を過ごした。

慈光院では,書院,茶室のほか,周囲の風景・景観と調和するように構成された借景庭園を見学し,当麻寺では中将姫伝説の残る中之坊本堂でお参りし



慈光院住職の解説を熱心に聞く参加者

た後,庭園や中之坊に伝わる宝物が納められた霊宝館を見学したほか,当麻曼荼羅が祀られた曼荼羅堂,塑像弥勒仏坐像が保存されている金堂などを見学した。

当日,解説いただいた講師は次のとおりである。

(歴史)西山良平(人間・環境学研究科 教授)

(建築)山岸常人(工学研究科 教授)

(造園)柴田昌三(地球環境学堂 教授)

(美術)根立研介(文学研究科 教授)



当麻寺曼荼羅堂で山岸教授の解説を熱心に聞く参加者

(総務部)

訃報

このたび、^{きたむらてい たろう}北村貞太郎名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。

北村 貞太郎 名誉教授



北村貞太郎先生は,9月20日逝去された。享年79。

先生は,昭和31年3月に,京都大学農学部農業工学科を卒業の後,農学部助手,助教授に就任された。昭和56年4月に大学院農学研究科内に熱

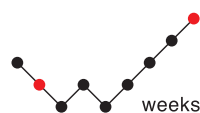
帯農学専攻が新たに設置されると,直ちに教授に昇任され,同専攻の地域計画論講座を担当された。平成9年3月に停年により退官され,京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は,平成9年4月から同17年3月まで,東京農業大学国際食料情報学部教授を務められた。

先生は,土地分級による土地利用計画論,農村地域の土地利用秩序形成論,農村整備計画論,発展途上国における農村開発戦略に関する研究などについて

で優れた研究業績を数多く残された。また,農学分野において「農村計画学」並びに「システム農学」という学際性と問題解決志向を備えた学問領域を創設し,新たな学会組織を立ち上げ,学問的発展の基礎を築かれるとともに,両学会において学会長を務められた。

一方,昭和63年7月に日本学術会議の第6部会員に就任され,平成8年10月からは第6部会部長を務められた。この間,地球圏-生物圏国際共同研究計画(IGBP)に関する政府への提言に積極的に関わり,同会議の地球環境研究連絡委員会の委員長として,地球環境の研究推進にかかわる提言を取りまとめるとともに,自らも国際応用システム分析研究所や国立環境研究所との国際プロジェクトを主導された。

(大学院農学研究科)



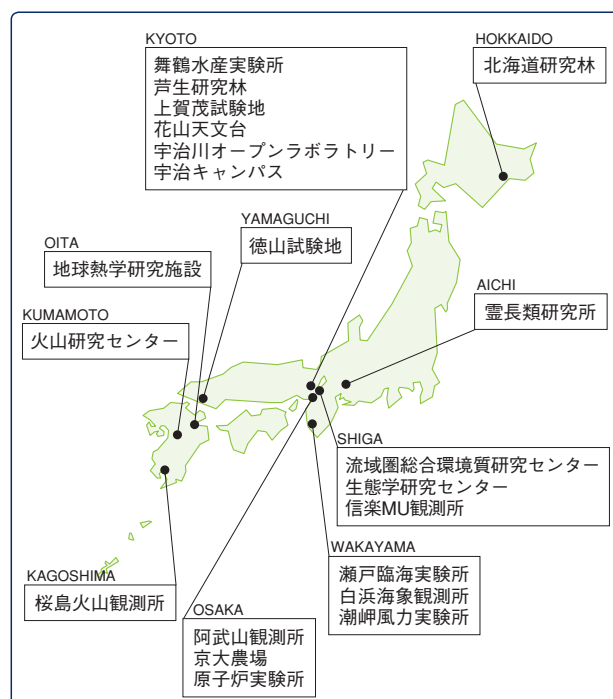
京大ウィークス2013 Vol.1

京都大学では、北海道の研究林から鹿児島・屋久島の野生動物研究センター観測所まで、日本全国各地に数多くの教育研究施設を展開している。これらの隔地施設は、本学の多様でユニークな教育研究活動の拠点として重要な役割を果たすとともに、施設公開などを通じて、それぞれの地域社会における「京都大学の窓」として親しまれてきた。

「京大ウィークス」は、これら多様な隔地施設の活動を学内外に紹介することを目的に、従来からそれぞれの施設で行ってきた公開イベントを、毎年秋の一定期間に集中して行う企画である。

今年度は、21の施設が参加して10月12日(土)から11月9日(土)までの期間で実施した。

今号より数回にわたり、同イベントの実施内容を紹介する。



10月12日(土)	流域圏総合環境質研究センター 施設公開
10月12日(土)	白浜海象観測所 観測船を使った海象観測の実体験
10月19日(土), 20日(日)	宇治キャンパス公開2013
10月19日(土)	徳山試験地 周南市との連携公開講座
10月19日(土), 20日(日)	桜島火山観測所 施設探検ツアー・施設公開
10月20日(日)	宇治川オープンラボラトリー 公開ラボ
10月20日(日)~22日(火)	阿武山観測所 オープンラボ 京大ウィークス特別バージョン
10月20日(日), 26日(土)	原子炉実験所 アトムサイエンスフェア実験教室・講演会
10月25日(金)	芦生研究林 公開講座
10月26日(土)	信楽MU観測所 MUレーダー一般講演会
10月26日(土)	瀬戸臨海実験所 施設見学会
10月26日(土), 11月2日(土)	地球熱学研究施設 建物(登録有形文化財)ライトアップ
10月27日(日)	北海道研究林 ミニ公開講座
10月27日(日)	霊長類研究所 第23回市民公開日
10月27日(日)	舞鶴水産実験所 企画展
10月31日(木)	火山研究センター 登録有形文化財記念講演会
11月2日(土)	生態学研究センター 一般公開
11月2日(土)	花山天文台 天体観望会
11月2日(土)	潮岬風力実験所 気象観測入門
11月3日(日・祝)	京大農場オープンファーム2013
11月9日(土)	上賀茂試験地 秋の自然観察会

(渉外部)

京都大学宇治キャンパス公開2013

宇治キャンパスでは、10月19日(土)、20日(日)に「京都大学宇治キャンパス公開2013」を開催した。毎年秋に行うこのイベントは、宇治キャンパスでどのような研究を行っているかを一般の方に広く知ってもらい、大学の研究活動への理解を得るとともに、科学の魅力について考えてもらうことを目的として開催している。17回目となる今年は「探検！発見！きみがつくるサイエンス」をテーマに、誰でも楽しめるよう、そして何より、私たち自身が楽しんでいる「発見」を共有してもらえようわかりやすく紹介した。

宇治おうばくプラザきはだホールで行われた特別講演会では、「ブータンヒマラヤ地域の地震災害軽減をめざして」(大見士朗 防災研究所准教授)、「生活を支える植物の力ーきれい、おいしい、みんなの元気ー」(矢崎一史 生存圏研究所教授)、「プラズマって、なに？」(中村祐司 エネルギー科学研究科教授)と題して行った。

また、18日(金)にはプレイベントとして工学研究科の公開シンポジウム、20日(日)には化学研究所および生存圏研究所の公開講演会を行った。

公開ラボでは、津波、高潮、豪雨による浸水を防ぐために共同研究で開発された「フラップゲート」の公開実験が行われたほか、強くても軽い植物由来の新材料「ナノファイバーにさわろう」など、普段は見ることができない研究施設や実験室の公開などが行われ、たくさんの最先端研究が紹介された。

地域のイベントとして、誰でも楽しめる工夫をこらしたプログラムに、毎年足を運ぶ方も増え、2日間であわせて2,400名近くの参加者が秋の1日を楽しんだ。

(宇治地区事務部)



公開ラボ「トンボ玉製作体験ーガラスの性質を学ぼう」



公開ラボ「作ってみよう核融合炉」



公開ラボ「樹木を支えるナノファイバーにさわろう」



「2013よくできたで賞」
公開ラボ「近畿の地震と活断層で探る」



公開ラボ「フラップゲート：津波・高潮・豪雨の浸水を防ぐ」



公開ラボ「タンパク質の構造を見る」